東南アジア研究　39巻1号　2001年6月

海岸複合地形における砂丘上村落の農業開拓

髙　田　洋　子*

A History of Agriculture in the Coastal Complex Area of the Mekong Delta

TAKADA Yoko*

According to N. H. Chiem, an agronomist familiar with the Mekong Delta, the region is divided into several geographical parts from the point of rice agriculture. Among them, the "coastal complex" is a unique area, composed of sand ridges, coastal flats, inter-ridges, and mangroves. This paper focuses on the development of land use in one particular village in the coastal complex division in order to gain a better understanding of the history of multiethnic society in the Mekong Delta.

The research village is in the east of Tra Vinh City, which is characterised by multiethnic society: the Khmer (Cambodian) people, who occupied the sand ridges from an earlier time, the Kinh (Vietnamese) people, who began living along the small rivers, and the Hoa (Overseas Chinese), who have mixed intermittently with both groups.

First, intensive field research involved observing the natural conditions of agriculture, the geographical distribution of ethnic groups, and how land use in the village determined the process of settlement and land clearing by the different groups. Second, based on accounts of Buddhist monks and village elders of both ethnic groups in local hamlets, and considering the origins of Buddhist temples (Theravada, Mahayana) and old community buildings, the writer assumes the process of village development. It is supposed that Khmer society was found there earlier than the 16th century. The Kinh advanced from the right side of Cochien river to the north area in the sand ridge at the beginnig of the 19th century and was organized along with the Khmer people in the same administrative unit under French colonial rule in the late 19th century. Changes in the population shares of each ethnic group and landholding from the French colonial period until today are analyzed through the results of interviews with village elders and also the use of related colonial documents held in the National Archives.

At last, the writer presents a history of the village giving attention to the historical relations in the ethnic groups, and finally points out how structural social problems were cased during French colonial time and one of the reasons for the revolution occured in the village during the Indochina war.

* 敬愛大学国際学部; Department of International Studies, Keiai University, 1-9 Sanno, Sakura-City, Chiba 285-8567, Japan

はじめに

チャヴィンの地形は，海岸平野とその中に何本もの細長い円弧を描く砂丘列，砂丘列間の潟地，マングローブ樹林帯などを含むメコンデルタの「海岸複合地形」を代表する。ベトナム語のチャヴィン Tra Vinh（茶栄）は，もともとクメール語の Prac Prabang（仏陀の池）に由来するという。[1] チャヴィン市の中心部からおよそ 5 km 離れた旧 Tra Phu 県 Nguyet Hoa 村には，その名に因む Ao Ba Om の観光地がある。長方形の巨大な池を中心に，その周囲を見事な老大樹（dao/sao）が縁取る静かな公園である。乾季にも水が枯れることのない池のほとりには，真新しいクメール民族記念博物館が建っている。池の遊歩道を散策すれば，遙かな時を超え行くような空間が水面から立ち上る。チャヴィンは，ドイモイ下のメコンデルタで進行中の商業的でダイナミックな発展にはどこか距離を置いた，独特の風土を感じさせる一地方である。本稿が調査事例としたのは，この同省の古い砂丘上に立地するホアトゥアン Hoa Thuan 村である。[2]

チャヴィン省は，19 世紀末から 20 世紀初頭の世紀転換期に，フランス領コーチシナで最大規模のクメール族人口を擁した［高田 1984：253］。ベトナム領メコンデルタには現在もなお約 90 万人の在住クメール族が，チャヴィン，ソクチャン，チャウドック 3 省に偏在する。ベトナム領メコンデルタの総人口に占めるクメール族の比率は，20 世紀初頭には 12% 以上であったが，現在は6%に減少している。率直に述べて，20 世紀を貫ぬくメコンデルタの民族史は，キン（ベト）族による「ベトナム化」を抗いがたい底流とした。

筆者は本稿において，これまでネガティヴにしか叙述されてこなかったメコンデルタの先住クメール人農業社会に光を当てる。農業開拓からみたデルタのクメール族およびキン族の民族間関係史を，チャヴィンの一地域の事例から具体的に考察する。フランス植民地時代の記述に依れば，クメール集落は，自然の排水によって雨季の洪水を免れる砂丘（帯状微高地 giong）に立地した。人々は砂丘とその斜面の土地で，雨季の稲作と乾季の地下水利用の畑作を組み合わせ，1 年を通した農業を営んできた。

1）「Tra Vinh」は，フランス植民地期以来使用されたベトナム語アルファベット表記。植民地期以前には，ベトナム人は漢字で「茶聞」［pra を茶（tra），bang を聞（vang）］と記していた［La Société des études indo-chinoises（以下 SEI と略）1903: 5］。

2）1994 年 8 月および 95 年 8 月にチャヴィン省全体を概観するための予備的一般調査を実施し，続いて視察した数カ村の中から調査村を決定した。1996 年 8 月（雨季）および 1998 年 3 月（乾季）にホアトゥアン村の臨地観察とインテンシヴな聞き取り調査を行った。1995 年 12 月，96 年 8 月，97 年 7 月には，ホーチミン市のベトナム国家公文書保存センターⅡにおいて，ホアトゥアン村周辺に関する仏領期文書史料の調査を行った。本稿は高田［1999］を加筆修正したものである。

メコンデルタの村落の開拓過程に関する文献資史料は，極めて限られる。筆者は調査村に関するできる限りの文字史料を発掘すると共に，臨地調査によって得られた諸結果をそれらに重ねあわせることによってイメージ化された一地域の農業開拓史を，本稿で描くことにする。その作業を通して，メコンデルタ先住農業社会へのキン（ベト）族の進出過程，新しい植民地支配下での開発がもたらしたもの，そして20世紀メコンデルタ史の最重要のテーマであった大地主制の成立と解体過程を考察する糸口としたい。

本論の構成は，まずⅠで，チャヴィン省の自然と多民族社会の現状を概観する。次にⅡでは臨地調査を実施したホアトゥアン村について，地形と土壌を軸とする農業条件，土地利用の変遷，集落と民族の分布，および諸集落の成立史に関わる社会的建造物の具体的状況から，農業開拓の過程に関する仮説を提示する。さらにⅢにおいて，歴史資料の分析も加えながら，村落内における諸民族の統合過程を考察する。Ⅳでは，ホアトゥアン村の植民地期旧大地主についての聞き取り調査で収集した情報を分析し，調査地域の土地集積と解体過程の一端を再構成する。

Ⅰ　チャヴィン省の農業社会

Ⅰ-1　自然と稲作

メコン河の本流 Tien Giang（前江）は，Vinh Long（ヴィンロン）付近でいくつもの支流に分かれる。そのうち一番西のコチエン Co Chien 河と，メコン河の西の分流ハウ河 Hau Giang（後江）に挟まれ，南シナ海に臨む地がチャヴィン省である。上流側にヴィンロン省，コチエン河左岸にベンチェ省，ハウ河右岸にソクチャン省が接している。チャヴィン省の海岸複合地形を最も特徴づける微高地 giong（以下砂丘と表現する）は，海岸線と平行に緩やかな円弧を描いて，帯状に何層も発達している。それらは標高 2 m～ 4 m 以内，幅は 500 m～ 2 km，またその長さはわずか数メートル～ 40 km に及ぶものまで様々で，とぎれがちに存在する。砂丘列の間には海抜 1 m 以下の低地や潟地，自然小河川等を含む。

川の沿岸近くでは，自然河川を伝い，または土中の浸透圧によって乾季（11 月から 4 月）に潮水が浸入する。塩分土壌の問題をかかえる同省南部は，同省北部と比べて農業生産力が低い。海岸複合地形にみられる土壌の塩分汚染は，降雨量の少なさと相俟ってこの地域の農業発展の桎梏とされる。それは，現在のチャヴィン省がメコンデルタ最貧地域である理由の一つに挙げられる。

ベトナム南北の統一後，政府は旧クーロン省（現ヴィンロン省とチャヴィン省を含む）の水利事業として，Manthiep 川から真水をチャヴィン地方に供給する水路の建設，および海水の進入を防ぐ水門建設を推進した。チャヴィン北部の諸県はいち早くその恩恵を得た。1990 年の

稲作状況（表１）から，Cang Long，Cau Ke および Tieu Can の北部３県においては，灌漑が必要な冬春米の栽培および作期の短い高収量品種米の導入が早かったことが確認できる。北部３県は，このようにチャヴィン省の稲作先進地域である。

表１　チャヴィン省７県の米生産状況（1990 年）

	米生産		冬春米		夏秋米		雨季米	
県　名	面積 ha	生産量 ton	ha	ton	ha	ton	ha	ton
Cang Long	32,527	113,606	9,524	42,713	14,361	40,088	8,642	30,805
Cau Ke	27,905	107,022	5,450	25,506	14,048	52,744	8,407	28,772
Tieu Can	19,327	65,612	4,435	18,828	7,281	21,644	7,611	25,140
Chau Thanh	22,253	60,750	638	2,066	4,782	9,867	16,833	48,817
Tra Cu	19,556	56,781	890	3,133	2,649	8,289	16,017	45,359
Cau Ngang	15,246	41,818	—	—	2,171	6,390	13,075	35,428
Duyen Hai	3,679	9,420	—	—	171	522	3,508	8,898
計	140,493	455,009	20,937	92,246	45,463	139,544	74,093	223,219

出所：[Vu Nong Nghiep Tong Cuc Thong Ke 1991: 586]

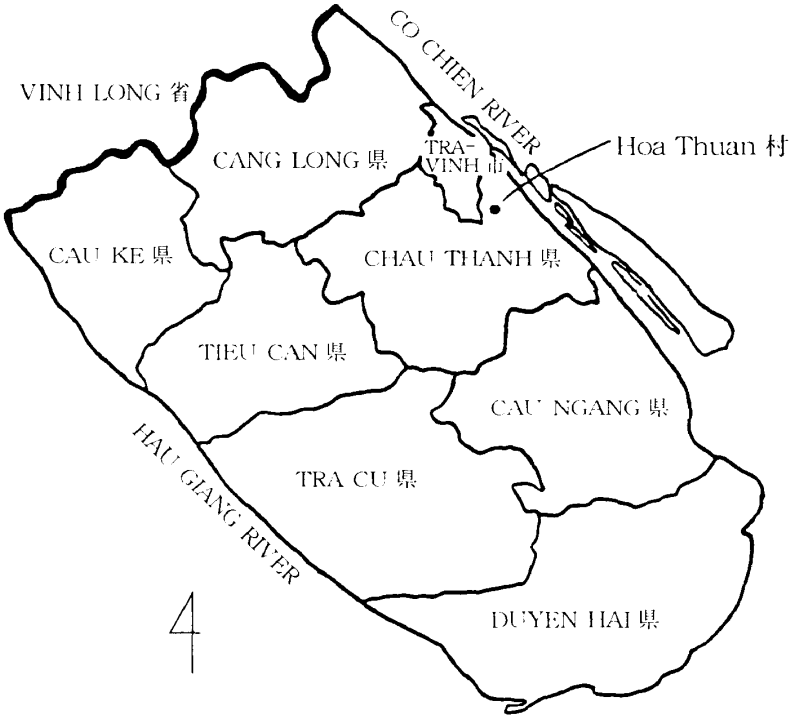


図１　チャヴィン省７県と調査村の位置（1995 年）

これに対して砂丘や塩分土壌の問題の多い南部諸県は，伝統的な雨季1期の稲作が中心である。[3] 南部の Tra Cu において大規模な幹線水路事業が完成したのは，1995年である。南部諸県の地方政府は，引き続いて幹線水路につなぐ第2次・第3次水利網の拡大に力を入れている。チャヴィン南部は，90年代の半ば以降にようやく集約的農業の時代を迎えたのである。[4]

I-2　民族分布

チャヴィン省の総人口約98万人のうちベトナム・キン族（Kinh）は約70万人（70.9%）である（1995年現在）。クメール族（Khmer）は27万人（27.6%），そのほか中国系 Hoa が14,000人（1.5%），少数のチャム人（Cham）も居住している（表2）。[5]

表2　チャヴィン省の県別民族人口（1995年）

県・市	人　口	Kinh 人口（%）	Khmer 人口（%）	Hoa 人口	Cham 人口	その他
Tra Vinh 市	68,444	54,328（79.3）	6,689　（9.8%）	7,341	44	42
Chau Thanh 県	147,382	95,927（65.1）	50,429（34.2%）	994	0	32
Cang Long 県	158,490	149,678（94.4）	8,184　（5.2%）	572	11	45
Tieu Can 県	108,595	77,432（71.3）	29,507（27.2%）	1,647	0	9
Tra Cu 県	163,482	74,578（45.6）	86,729（53.1%）	2,106	7	62
Cau Ke 県	116,053	82,282（70.9）	33,186（28.6%）	580	1	4
Cau Ngang 県	137,832	94,167（68.3）	42,706（31.0%）	920	0	39
Duyen Hai 県	77,613	65,027（83.8）	12,394（16.0%）	189	0	3
計	977,891	693,419	269,824	14,349	63	236
	(100%)	(70.9%)	(27.6%)	(1.5%)	–	–

出所：[Tinh Uy, Uy Ban Nhan Dan Tinh Tra Vinh 1995: 26]

3）1994年8月に，Cau Ngang 県と Tra Cu 県の低地で行われていた田植えを視察。高畦に囲まれ，貯水池のように水を張った水田のなかで，農民が葉先を切り取った大苗の束を小舟で運んでいた。土壌を洗浄して塩分濃度を下げるために十分な降雨を待ち，田植えを行う。刈取りは，乾季に入るや土中の塩分濃度が高まる前に行われる。

4）95年以降の南部諸県では雨季の始めに短期収穫型の夏秋米を導入することにより2期作化が進展中だ。チャヴィン省全体でみても，夏秋米（秋米）の生産面積は急増している。灌漑設備を必要とする単位面積当たりの生産性の高い乾季作（春米）の生産面積も増大している。これらに対して伝統的雨季稲（lua mua）を中心とする冬米の生産は減少しつつある。

チャヴィン省における最近の米生産（1995–98年）

	作付け	生産性	生産量	春米		秋米		冬米	
	1,000 ha	Ta/ha	1,000 ton	1,000 ha	Ta/ha	1,000 ha	Ta/ha	1,000 ha	Ta/ha
1995	169.3	38.2	647.4	35.0	48.5	50.0	44.1	84.3	30.5
1996	159.2	42.6	678.7	39.1	46.2	66.3	34.9	53.8	47.6
1997	200.9	35.5	714.0	46.0	47.3	73.4	34.0	81.5	30.2
1998	210.0	35.4	744.0	48.5	48.7	80.0	32.7	81.5	30.2

出所：[Social Rebublic of Vietnam 1999: 53–70]

5）この種の統計は，自己申請に基づくエスニック分類である。

キン族は，すでに部分的には3期作も達成した前述の北部のCang Long県（Vinh Long省県境）と最南端のDuyen Hai県で著しく民族比率が高い。また省都を含めCau KeとTieu Canでも7割を占める。これに対してクメール族は，砂丘の発達した南部に多く居住し，とりわけTra Cu県では住民の多数派である。例えばTra Cu県Ham Giang村では，住民の85%がクメール族で占められ，同村のキン族もクメール語を話した［高田1996：18-19］。中国系はチャヴィン市内やハウ河に面したTra Cu県とTieu Can県に目立つ。人口は数字の上では少数だが，クメールもしくはキンとそれぞれ自己申告する人々にも，実際は中国系混血の場合が非常に多くみられる。

II　調査村地域の自然と農業

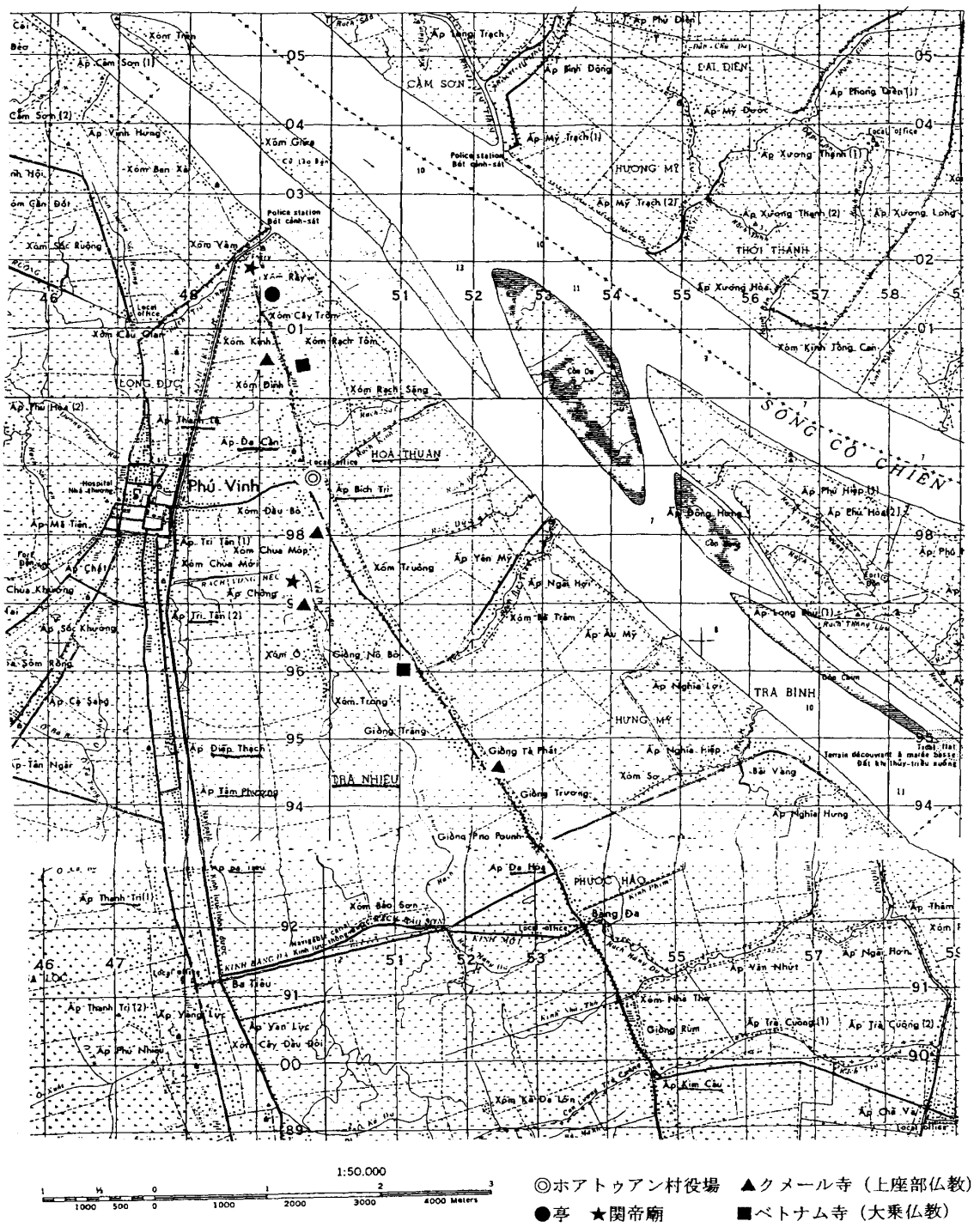
II-1　地形と土壌

ホアトゥアン村は，Chau Thanh県に属し，省都チャヴィン市の東隣りに位置する。北をコチエン河に，南をPhuoc Hao村，東をHung My村，南西をDa Loc村，北西をLong Duc村と接している（図2）。南北約10 km，面積2,700 haの細長い行政村に，人口17,180（1995年）を擁す。同村は1997年に南北二つの村に分離したが，本稿で用いる「ホアトゥアン村」は両新村を含む分離前の旧村を指すことをあらかじめ断っておく。

村の中央を，砂質の土から成る帯状の砂丘giongがほぼ貫通する。ベトナム地理院測地局作成の最新の10,000分の1地図に書き込まれた標高値によれば，砂丘といっても標高2 m前後から最高3.6 m程度の微高地である（図3）。それは村の北にゆくほど低く，幅も狭くなる。南に向かって幅は広くなるが，Phuoc Hao村境に近づくにつれ再び狭くなる。村の中央部には，主要な砂丘の西側に第2次砂丘ともいうべきやや標高の低い高みが沿っている。ホアトゥアンの人々は，砂丘の高い部分の農地をruong roc（山の田），第2次砂丘の農地をdat go（登り土）と呼ぶ。また砂丘両側の斜面はdong trien（傾斜地），砂丘東の低地はdong trang（白い平地），西の低地はdong o（黒い平地）と呼ばれる。

東西両側の斜面dong trienは，緩やかに傾斜して低地dong trangもしくはdong oへ続く。低地の標高はどこも1 m以下である。砂丘を中心に，東西の低地の高低差を比較すると，dong trang（コチエン河側）がdong oよりやや高い。dong trangは村の北から中央にかけて海抜0.9 mと示され，低地としては最も標高がある。コチエン河からの浸水はこれでかろうじて封じられる。

地図上は，南にゆくにつれて海抜0.8 mから少しずつ低くなって0.6 m以下の窪地も含む。他方，砂丘の西側dong oでも，南にゆくほど0.6 m～0.7 mの低位な平地が多くなる。つまり低地は南部ほど雨量を溜めやすく，集水域も広い。



◎ホアトゥアン村役場　▲クメール寺（上座部仏教）
●亭　★関帝廟　■ベトナム寺（大乗仏教）

図2　ホアトゥアン村周辺地図（1960年）

注: ゴーディンジエム政権期の地図では，Tra Vinh は Phu Vinh に変わり，Ky La, Tri Phong, Qui Nong などの地名は無くなっている。

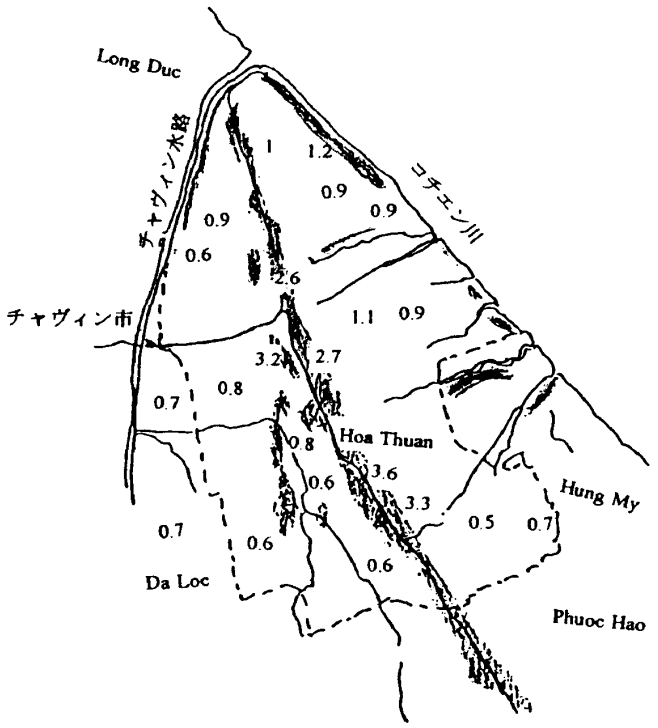


図 3　ホアトゥアン村の地形（砂丘・低地・自然小河川）

注：数字は海抜を表示

dong trang には，コチエン河に注ぐ自然の小川がいくつもある。乾季には，これらの小川は潮汐作用に伴って海水を進入させる。海水の浸入は土壌に深刻な悪影響をもたらす。塩分が残留し，さらに酸性土壌の問題を引き起こすからだ。コチエン河から地中を通って塩分が地表にあがることもある。dong trang の土壌は北にゆくほど塩分濃度が増し，giong の地下水にも塩分が含まれる場合がある［髙田 1997: 84］。村の北部はこのように自然条件が悪く，とりわけコチエン河沿いほど水文・土壌の農業環境は厳しいことが想定される。

dong o 側にもチャヴィン水路に注ぐ小さな川がある。またコチエン河の支流 Ban Da 川の上流は dat go の麓に達し，窪地には乾季も排水できない溜め水を含んでいる。ここでは，酸性土壌 phen の問題が現れる［髙田 1998: 77］。

II–2　土地利用

村の総面積に対する農地（2,409 ha）の占める割合は，約 90% である。まず，砂丘上には樹木が生い茂り，屋敷地を含む集落の他，水田や畑がみられる。またアスファルトの県道や舗装していない大小の村道，寺院や村の公共施設があり，残りはたいてい竹林に覆われている。ruong roc は，村の人口増加やチャヴィン市街地の周辺部への拡大のおかげで，縮小化の傾向

にある。

中心部から南の ruong roc や dat go では，雨季稲の他，乾季の畑作が盛んである。畑のそばには，直径3mから5mのすり鉢状逆円錐形の穴が掘られる（クメール農民は［tro pang (peang?)］と呼んでいる）。乾季になると穴はさらに大きく掘られて，内側斜面に底までおりるための階段が刻まれる。穴の底に溜まる水は，肩に乗せた天秤棒の両方の先に下げたじょうろ（トゥオン）で汲み上げられ，周囲の畑にまかれる。ドイモイ後の市場化の進展で，畑作物の種類は増え，多毛作が熱心に行われるようになった。老人を対象とした聞き取りに基づけば，このような乾季の畑作はフランス植民地時代にも行われていた。収穫した野菜，サツマイモ，サトウキビなどを人々はチャヴィンの市場に行商した［同上論文：68–69］。砂丘斜面は，畑作（野菜・根菜類）や水田の他，両側の低地水田に移植する苗代用の土地として利用される。

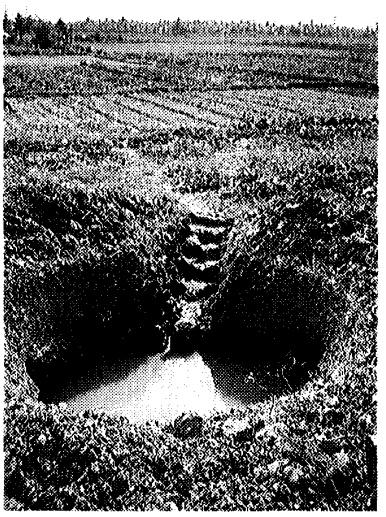


写真　畑に灌水するために掘られた砂丘斜面のため池（ホアトゥアン村 Bich Tri 集落 1998年3月筆者撮影）

低地では，従来もっぱら雨季に水田耕作が営まれた。昔の地主は，乾季に田圃へ海水が浸入するのを防ぐために，小川の両岸に高い堤防を築くことを小作人に命じた。堤防が少しでも破壊されると，地主は犯人を捕らえて厳しく罰したという。小川沿いは潮汐運動で運ばれる真水を取り込んで稲を育てながら，同時にエビや魚を田で捕獲することも行われた。東低地は，高みでは干ばつの害を回避するために早生稲を，低みの土地では中生稲もしくは晩生稲を栽培した。窪地は雨季に冠水して籾の収穫ができないときもある。その場合は砂丘でキャッサバを作って食糧とする［河野 1997：53］。低地は雨季稲栽培が終わると高畦で仕切られた乾いた平原となり，水牛や牛が放牧される［髙田 1998：74, 76］。

1980年代半ば以降に，砂丘両側の低地では水路と水門の建設が推進された。水路はポンプ揚水による灌漑を可能とし，雨季には多雨による稲の冠水の害を避ける排水路として使われる。水門は乾季に閉じられて，塩分を含む川水の浸入をくいとめる。雨季に排水が必要となれば弁が開けられる。それらのおかげで，現在では旧暦の4月から8・9月までは夏秋米（Cu Long 8）をポンプ揚水を利用して栽培し，その後に雨季稲（Tai Nguyen）を作る2期作農家が増えた。その結果，最近では砂丘上や斜面の土地よりも，浸水の害を受けやすかった低地の方が，高値になったという。

村内の水路が完成されるかどうかは，村の地勢局幹部が水路建設で農地を失う農家を説得で

きるか否かにかかっている。受益農民を中心に，掘削のための労働力も調達されなければならない。西側低地に掘られた東西数本の水路両側には，周辺集落から新たに農家が斡旋されて入植しつつある。人工の高みでは，果樹栽培（バナナやココヤシ）や畑作（唐辛子，ネギ，野菜など）も試みられている［同上論文：77; 河野・松尾 1998：104］。

以上の観察から，当該地域の開拓前の原風景および開拓過程を次のように考えることができる。沿岸地帯に形成されたわずかな標高差をもつ砂丘は，現在の沿岸部がそうであるように，もともとは汽水地域に植生が適したマングローブで覆われていたはずである。砂丘が次第に陸地化するにつれてマングローブは消滅し，砂丘とその斜面は竹林その他の樹木で覆われるようになった。一方，砂丘両側の低地は雨季には降雨によって浸水しがちである上に，乾季には潮水の浸透による塩分土壌の問題，あるいは溜まり水の蒸発によって土壌は酸性化し，作物の成長に不適地であった。乾季はひからびた大地と化し，窪地には限られた草類のみが生育した。さらに，自然の小川沿いは，海水の浸入に強いニッパ椰子類の植物が繁茂していたであろう。

このような自然環境のもとで，人々の入植と農業開拓は，まず人間の飲料水と作物の生長に必要な水の確保が容易であり，作物栽培にとって土壌の条件が良いこと，また雨季の排水の容易さ等の諸条件を満たす場所から開始されたと考えられる。これらの条件は，第1に砂丘もしくは砂丘列に挟まれた緩やかなくぼみをもつ dat go や砂丘斜面にそろっている。従ってこのような土地の農業開拓から始まり，その後に砂丘両脇の低地の開発に進んだと想定される。また先述のように村の南部ほど農業の土壌条件・水文環境がよいことから，古い開拓は村の南部が北部や中央部に先んじて進行した。当該地域の北にゆくほど，また低地では東側の自然小河川沿いおよび窪地ほど，農業生産活動は容易でない。したがって，これらの土地の開田時期は相対的に遅かったと考えられる。

II-3　集落の形成と民族分布

ホアトゥアン村の人口密度は634人/km^{2}で，メコンデルタの平均である約400人/km^{2}の1.6倍に達している。漁業が盛んな Vinh Bao 集落は除外しても，一人当たり土地面積の平均は0.14 ha に過ぎない。表3の10集落（ap）のうち，1平方キロメートルに900人を越す程の人口稠密な集落は，Ky La, Da Can, Chang Mat の3集落である。

村内10の集落は，1997年から17集落に分けられた。ホアトゥアン村の民族別世帯数の比率はキン，クメール，中国系でそれぞれ51.7%，47.5%，0.7%である（表4参照）。同村は，チャヴィン省でもクメール族のかなり比重の高い村であると言える。集落別民族分布の特徴は次のように明確である。第1に，キン族がほぼ住民のすべてを占めるのは，新集落名で Vinh Bao, Xuan Thanh, Vinh Truong, Vinh Loi, Rach Kinh の5新集落，すなわち村の北部およびコチエン河の支流沿いである。これに対してクメール族が圧倒的多数を占めるのは，Kinh Xang,

表3　ホアトゥアン村の集落別農地面積と人口密度（1995年現在）

集　落	総面積 ha	農地面積 ha	人 口	人口密度	1人当たり農地面積 ha
① Vinh Bao	45.99	32.72 (1.4%)	1,331	2,893人/km²	0.02
② Xuan Thanh	258.22	238.86 (9.9%)	1,603	621	0.15
③ Ky La	170.68	154.76 (6.4%)	1,690	988	0.09
④ Vinh Loi	362.10	264.79 (11.0%)	1,259	348	0.21
⑤ Bich Tri	96.49	184.83 (7.7%)	1,229	627	0.15
⑥ Da Can	148.21	134.24 (5.6%)	1,406	950	0.10
⑦ Tri Phong	331.94	302.96 (12.6%)	1,558	471	0.19
⑧ Chang Mat	276.16	255.66 (10.6%)	2,610	946	0.10
⑨ Qui Nong	568.30	522.41 (21.7%)	2,956	520	0.18
⑩ Da Hoa	352.10	317.84 (13.2%)	1,538	437	0.21
計	2,710.19	2,409.07 (100.0%)	17,180	634人/km²	0.14 ha/人

出所：ホアトゥアン人民委員会提供資料。人口密度，1人当たり農地面積は筆者が算出。

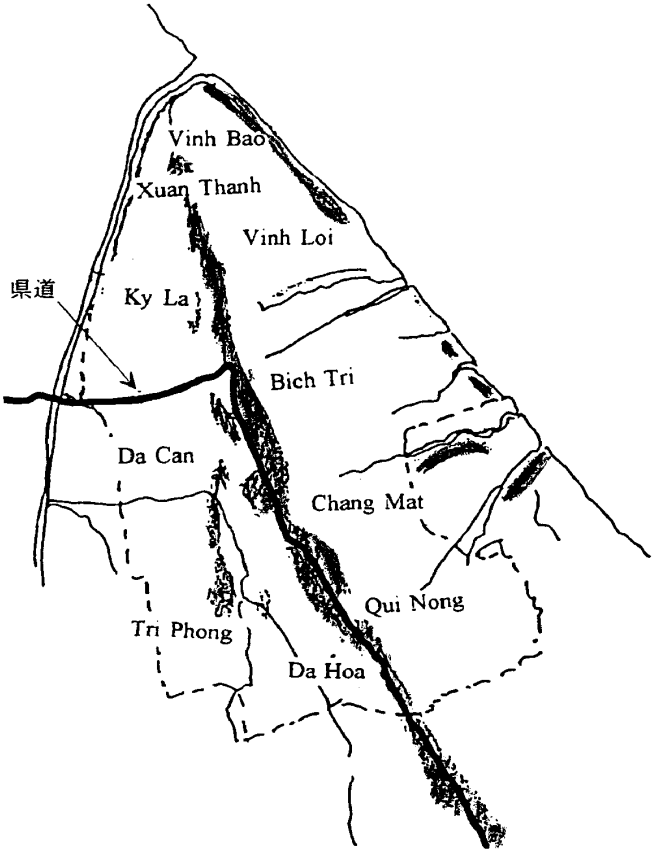


図4　ホアトゥアン村の10集落の位置

表 4　ホアトゥアン，ホアロイ両村の新集落別民族世帯の分布（1998 年）

グエン朝期旧村名	旧集落名	新集落名（世帯数）	人口（人）	エスニック別世帯数		
				Kinh	Khome	Hoa
Vinh Truong	① Vinh Bao	i) Vinh Bao (264)	1,365	249	0	15
	② Xuan Thanh	i) Xuan Thanh@ (149)	802	145	0	4
		ii) Vinh Truong (177)	839	170	7	0
	③ Vinh Loi	i) Vinh Loi (115)	601	115	0	0
Ky La	④ Ky La	i) Ky La* (133)	666	87	46	0
Da Coc		ii) Rach Kinh# (121)	658	118	3	0
Bich Tri	⑤ Bich Tri	i) Bich Tri (278)	1,346	109	169	0
Da Can	⑥ Da Can	i) Da Can* (285)	1,743	101	184	0
		ii) Dau Bo (248)	1,275	183	65	—
		新 Hoa Thuan # (1,770)	9,295	1,277	474	19
Phi Nhieu	⑦ Tri Phong	i) Tri Phong* # (193)	920	32	155	6
Ky Phong		ii) Kinh Xang (170)	820	1	169	0
Than Mat	⑧ Chang Mat	i) Chang Mat # (213)	1,081	143	70	0
		ii) Truong (217)	1,052	150	67	0
Qui Nong	⑨ Qui Nong	i) Qui Nong A (27)	1,353	135	142	0
		ii) Qui Nong B* (277)	1,403	8	269	0
Da Hoa	⑩ Da Hoa	i) Da Hoa Bac (130)	733	2	128	0
		ii) Da Hoa Nam (153)	731	11	142	0
		新 Hoa Loi 村 (1,630)	8,093	482	1,142	6
Hoa Thuan 全体		(3,400)	17,388	1,759	1,616	25
		民族別世帯比率%	99.9	51.7	47.5	0.7

注：Khome は Khmer と同じ。クメール族（カンボジア人）を指す。新集落名の後に，クメール寺院があれば *，亭は@，ベトナム寺院は#で示した。

Qui Nong B, Da Hoa Bac, Da Hoa Nam の 4 新集落，つまり村の南部および dong o の新しい水路沿いである。残りは両者がともに居住する。先の人口稠密 3 集落は，キン族が優勢を占める両者の共存地域である。

このように当初の農業開拓の自然的条件に恵まれた村の南部は，先住クメール族が優勢な地域である。Tri Phong，Chang Mat，Qui Nong に存在する dat go の土地は，農業生産が容易で古くに開墾された可能性が高い。後に確認するように，クメール族の最も古い社会とみられるそれらの集落地域は，ホアトゥアン地域における農業生産の核心域であったと推定できる。

それに対してキン族の分布は，現在でも最北部のチャヴィン水路河口部地域の Vinh Bao や Xuan Thanh，また彼らがコチエン河右岸に注ぐ支流沿いに東から西に進出したことを想定させるように，Kinh 川（Rach Kinh），Tom 川（Vinh Loi），Thi Tram 川（Chang Mat）の周辺部に集中している。これらの地域の農業条件はすでに論じたように相対的に悪く，現在でも半農半漁や家内小工業に従事する人々が多い。北部の Ky La 地区では，南北に走る村道を隔て

てコチエン側にキン族，西側にクメール族がほぼ対置している。

地域社会の成立過程を考察するに当たり，集落の社会的建造物の建設年代からも推察のヒントを得られる。聞き取り調査で得られた情報によれば（表5），最も古いクメール社会は南部のQui Nong周辺に，遅くとも16世紀末には成立していたと想定される。その後に第2次砂丘上のTri Phong周辺に集落の形成をみた。さらに17世紀後半以降に，コチエン河の左岸Ben Treから移住したクメール人がKy La周辺に集落を成立させた。Da CanやBich Triの集落は，フランス植民地化前後に人口が増えて寺院が建立された。

これに対してキン族社会は，後述するように，チャヴィンTra Vinh川河口のVinh Baoや村の北部Ky Laに，19世紀初頭にようやく足跡を残し始める。Tri Phongの関帝廟は，フランス時代に中国から渡来した華僑が，20世紀初頭に私財を投じて建立した。Vinh Baoではフランス時代に裕福な中国人の数家族が勢力を競ったという。

勿論，現存するこれらの建造物からのみ判断してしまうのは危険である。破壊されてすでに存在しない歴史物や見落とした遺跡がある可能性も否定できないからだ。しかし前述の農業にとって重大な自然環境と農業過程，および民族分布の趨勢から推定された結果と比して，それらの建造物からイメージされる社会形成の過程は，それほどの乖離を示さない。

表5　ホアトゥアン地域に現存する宗教・公共建築物の建設時期

寺院・亭名	創建年・その他
上座部仏教寺院	（クメール族に関して）
（1）Qui Nong寺	1000年前説（10世紀）・800年前説（12世紀末） 400－500年前説（15世紀末・16世紀末） シャムから送られた仏像に仏歴2137年の記述 同村最古の寺
（2）Tri Phong寺	600年以上前説（1361年）・700年前説（13世紀末）
（3）Ky La寺院	1666年Ben Tre地方から移動したクメール人建立
（4）Da Can寺院	1872年住民がカンボジアの王と植民地政庁に建立を申請
大乗仏教寺院	（キン族に関して）
（5）Giac Quang寺	旧Ky La集落に1916年建立。元はクメール寺の跡地
（6）Lien Quang寺	尼寺（Chang Mat）1945年創立，1992年改築
ディン（亭）	（キン族の伝統的な政の集会所）
（7）Dinh Vinh Thuan	「永順社・城隍境・永長村」（Xuan Thanh集落） 19世紀創設1941年修築1991年改築
	（中国系に関して）
（8）Mieu Ba Thien Hau（天后廟）	Vinh Bao集落チャヴィン水路沿い
（9）関帝廟	Tri Phong集落1911年在村中国人の寄付で建立

出所：現地聞き取り調査から。

III　文献に見る多民族社会の形成と開拓

III-1　行政上の統合

〈グエン朝時代〉

文献に見る限り，ハウ河（クメール語ではバサック Bassac 河）の河口に位置するチャヴィンとソクチャン両地方は，弱体化していたカンボジア王国から1775年に切り離されて，ベトナム広南グエン氏の支配下に組み込まれた。後のクメール民族主義者たちは，フランス植民地政府がその統治期に，たとえばバッタンバンやシェムレアップをシャムからカンボジアへ返還させた（1907年）にもかかわらず，メコンデルタのチャヴィンとソクチャンを「仏領コーチシナ」に留めおいたフランスを非難する［デルベール 1996：52］。

周知のように，19世紀キン族グエン朝第2代明命帝（在位：1820-40）の統治期は，中央権力の支配がベトナム全国に直接に及び始めた特筆すべき時代である。メコンデルタにおいても，キン族の役人はクメール族に対してカンボジアの慣習を捨てることを要求した。地簿や人丁簿は，クメール族の村や人名がクメール語の発音に類似した漢字を用いて表記されるようになり，ベトナム・キン族の統治下に編入されたことを具体的に示す。

チャヴィン一帯は，1825年に楽化府の下に Tra Vinh と Tuan My の2県が置かれ［Tinh Uy, Uy Ban Nhan Dan Tinh Tra Vinh 1995: 60］，Tra Vinh と Bac Trang にベトナム人の官吏が派遣された［SEI 1903：32］。

チャヴィンの地方史の文献に依れば，グエン朝の支配に反発したチャヴィンのクメール族は，コチエン河から進出したキン族の軍に対し，1841年に現ホアトゥアンの Ky La で激しく抵抗した［Tran Thanh Phuong 1989: 133; Tinh Uy, Uy Ban Nhan Dan Tinh Tra Vinh 1995: 68］。キン族の勢力は，コチエン河河口に永長 Vinh Truong 村（現 Vinh Bao 集落）を建設してキン族進出の拠点にした［SEI 1903: 32］。

キン族の軍に制圧されたクメールの村々は，楽化府（Lac Hoa Phu）茶栄県（Tra Vinh Huyen）永利総（Vinh Loi Tong）の行政機構のなかに統合された。現在のホアトゥアン村に含まれる7集落の名は，この永利総20カ村の中に見いだされる（表6参照）。これらの7村名は，クメール語起源の地名が漢字に置き換えられた村と判断される。[6] 先に見たキン族起源の Vinh Truong 村は，同県の茶平総（Tra Binh Tong）に属した。

6）グエン朝支配下で作成された膨大な地簿の研究家である Dau 氏は，南部の地名の特徴を分析し，母村名を起点に次々と派生される村名の法則性を論じている［Nguyen Dinh Dau 1994: 133-135］。またこのような村落名のヴァリエーションの基本となる使用頻度の非常に高いベトナム文字（漢字）を13例，やや多い頻度の9例を挙げている［*ibid*: 135］。先の7つの村名はこれらの通常文字は全く使用されず，クメール語音を漢字に当てた造語と考えられる。

表6　1868年永利総 Vinh Loi Tong の村一覧

平津村	Binh Tan thon	金溝村	Kim Cau thon	山榔村	Son Lang thon
*碧池村	Bich Tri xa	*奇豊村	Ky Phong thon	*慎蜜村	Than Mat thon
錦唯村	Cam Doi thon	楽義村	Lac Ngai thon	水澄社	Thuy Trung xa
*多芹村	Da Can thon	梅香村	Mai Huong thon	擇梁村	Trach Luong thon
#多穀村	Da Coc thon	檬樹村	Mong Thu thon	長溝村	Truong Cau xa
*多呑村	Da Hoa xa	#肥堯村	Phi Nhieu thon	*綺羅村	Y La thon
和睦村	Hoa Muc thon	*帰農村	Qui Nong thon		

注：*の村名はホアトゥアン村の旧集落名と判断される地名。大多数の村は thon だが，規模の小さなものを xa で示したと考える。アルファベット表記は地簿を分類整理した N. D. Dau 氏による。#を付記した村は，東西南北の位置比定によってホアトゥアン地域内と判断されるもの［Nguyen Dinh Dau 1994: 168-171］。

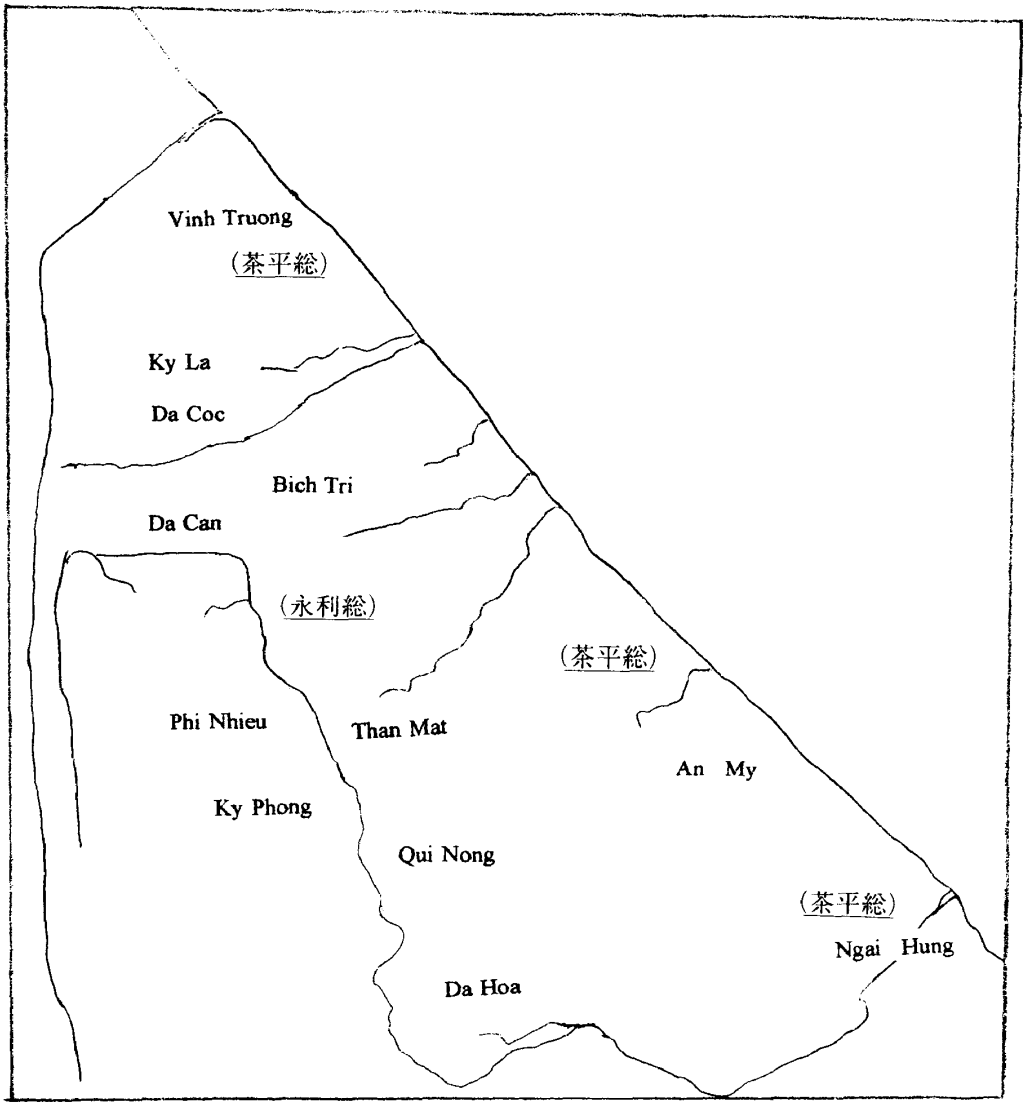


図5　グエン朝期永利総（Vinh Loi Tong）9村と茶平総（Tra Binh Tong）の村々の位置

〈フランス植民地時代〉

前述のように，クメール村落は19世紀の前半にグエン朝地方行政機構の県huyenの下位レベルであった「総tong」に，キン族の村落と同等の「村thonもしくはxa」として，そのままに組み込まれた。こうした状況は，フランス植民地支配下で変化を被る。ベトナム国家公文書保存センターII（在ホーチミン市）が所蔵する2つの資料を比較して，この点を明らかにしたい。

図6は，調査村周辺を描いた19世紀末の絵図である。和紙に墨を用いて筆で描かれたもので，漢字の村名およびそれぞれにフランス語表記が付された上，登録民（inscrit）の人数がメモ書きされている。コチエン河右岸に注ぐ10の川（rach）とその名，チャヴィン川に沿った茶栄の町も描かれている。注目されるのは，クメール人が居住する砂丘giongが楕円のかたまりのように表現されていることだ。砂丘上には北端と南端に，2文字の漢字でキン族の村Vinh TruongとDa Phuocの名がそれぞれ記され，一方クメール族の村は「茶」という1字を当てて村の番号を記しただけのような「茶1村」「茶2村」……とある。この史料を含むファイルには1874年という年が書き込まれていたことから，絵図はコーチシナ軍政時代（1862–80）にフランス海軍の現地監察官とベトナム人協力者によって作成されたと考えられる。

この絵図は，キン族が先住民クメールの住むgiongの両端に進出したさまや，コチエン河の支流沿いに集住していたことを物語っている。[7] フランス語表記部分が書き込まれる以前と思われる絵図の作成年代は，特定できない。しかし少なくとも1874年時点では，砂丘上のクメール村落の各領域および実態等は統治側が十分には把握していなかった可能性が考えられる。

ところが，この状況はコーチシナが軍政から文民統治に移行する1880年代に一変した。コーチシナ各地に20省（tinh）の行政機構が設置され始めた1880年以降，当局は創設する各省の植民地評議会のメンバーとなる現地人代表者（huyen県知事）を住民のなかから選出するために，県が含む村落毎の選挙人リストの作成に着手する。その過程で行政の末端組織となる「村」の領域と代表者が確定されていった。

図7は，1890年に植民地土地局が作成したホアトゥアン地域のKy La村とDa Can村の合併提案の図である。2万分の1の縮尺で油紙に色彩を加えて描かれたその地図には，砂丘上に寺院や民居の範囲が細かく記され，周辺低地の水田，チャヴィン市につなぐ掘削された運河や道路などが測地を基に描かれている。1880年代から1890年初期の段階で，フランス植民地権力がデルタの村落を掌握した事実を，ここから確認できる。[8]

7）チャヴィン省におけるキン族定住地についての一般的記述にも，同様の傾向が認められる［SEI 1903: 31–34］。ソクチャン省でも当時のキン族の居住地域は，ハウ河の支流沿いや，砂丘の端であるという類似した記述が散見される［Labussière 1889: 253］。

8）松尾［2001］は同公文書保存センターIIでの調査を基に，バリア省の地簿について表記上の分析からこの点を指摘している。

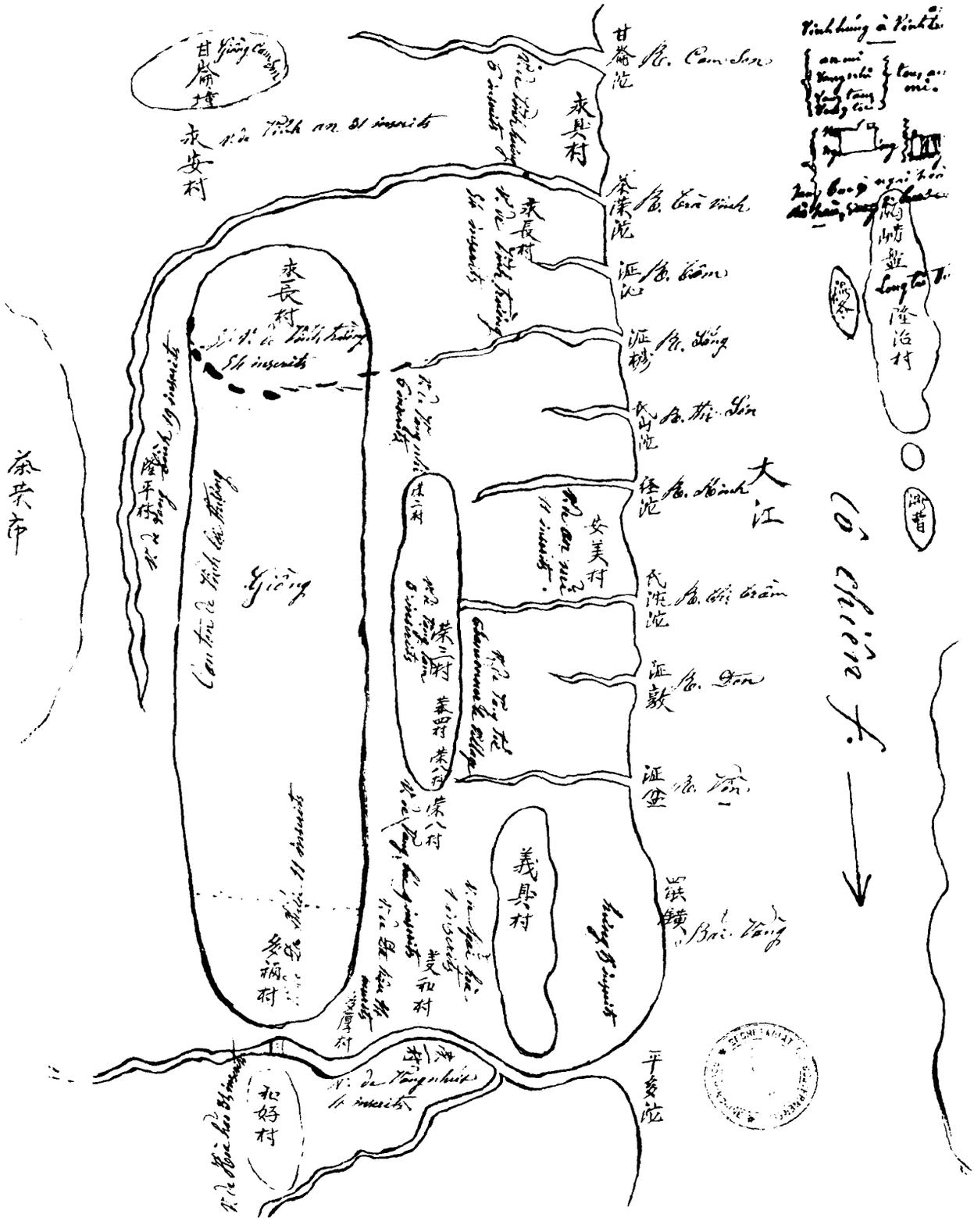


図6　ホアトゥアン地域絵地図（1870年代史料）

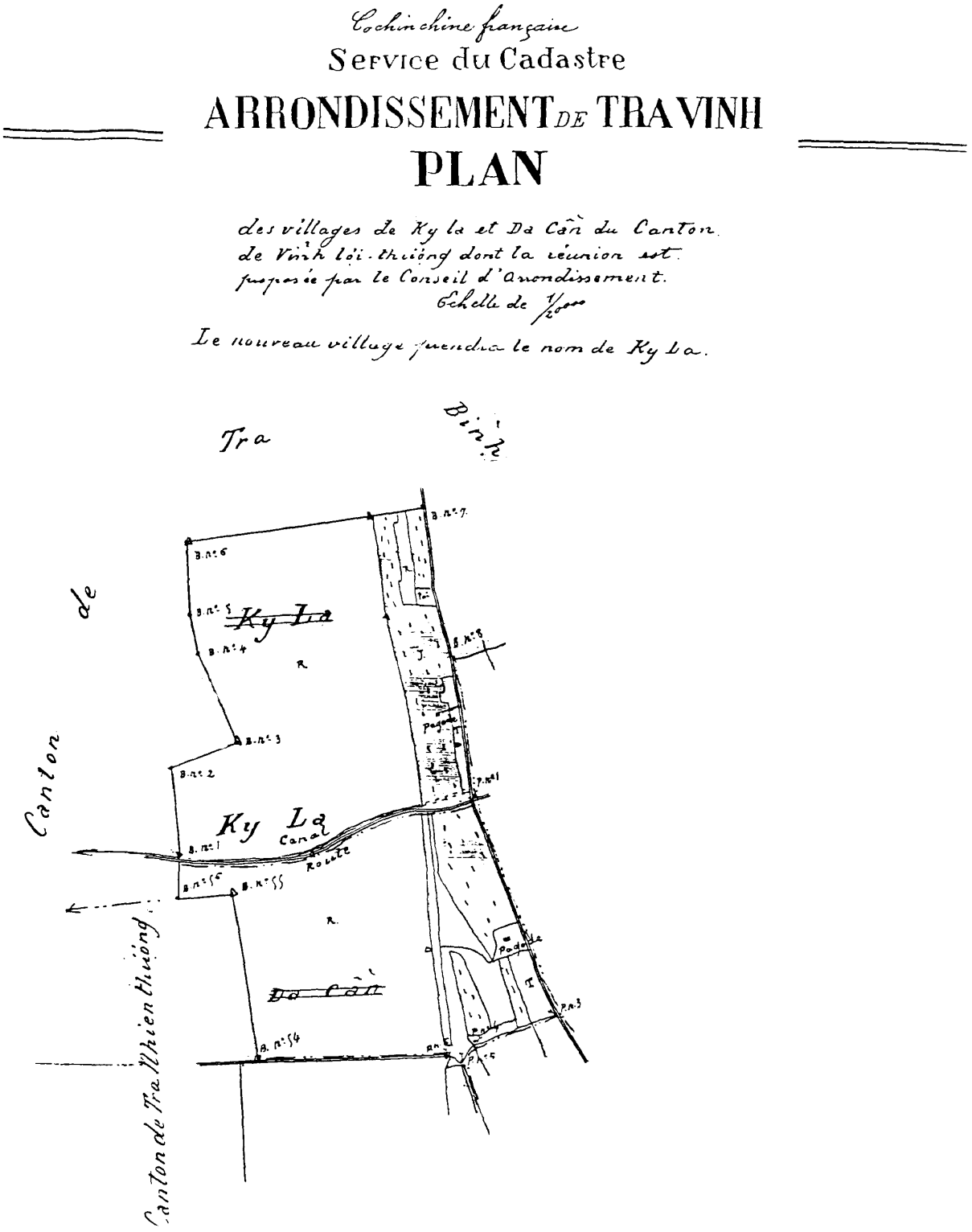


図7　Ky La, Da Can 村の合併

また，選挙人リストの確定作業の一環で作成されたKy La村の郷職の署名の中に，クメール語のサインと並んでキン族の名が見られる［TTLT 1884: IA 17/123; 1900: IA 17/244; 1908: IA 17/265］のも，19世紀末から20世紀初頭の変化である。20世紀初頭までに行政村の領域が旧村の統廃合が繰り返される過程で確定され，クメールとキンのそれぞれの居住区は以前のように隔絶されたものとしてではなく，植民地秩序下の多民族村落に次第に編成されていったと考えられる。[9]

III-2　植民地期の民族と開拓

〈民族構成の推移〉

植民地時代の一般的傾向として，とりわけメコンデルタ西部地域では，浸水地の開拓に積極的であったキン族の進出が本格化すると，従来から微高地に居住していたクメール人は奥地へ移住するか，もしくは集落の離散，カンボジアへの移住を開始した。[10] 表7は，19世紀末から第一次世界大戦前にかけては一定していたコーチシナのクメール人人口比が，その後は低下したことを示している。

とりわけ1930年代後半からインドシナ戦争期にかけて，クメール人人口は半減するほどの激しい減少傾向に転じた。チャヴィン省ではこの全体の趨勢とは少し異なり，表8にあるよう

表7　フランス植民地期コーチシナ民族別人口推移

	1894 (a)		1913 (b)		1936 (c)		1951 (d)	
キン	1,752,200	(86.1%)	2,513,500	(87.7)	3,979,000	(86.2)	3,679,898	(81.1)
クメール	172,600	(8.5)	244,200	(8.5)	326,000	(7.1)	153,968	(3.4)
中国	58,800	(2.9)	65,800	(2.3)	171,000	(3.7)	678,261	(15.0)
その他アジア	48,900	(2.4)	32,700	(1.1)	* 124,000	(2.7)	3,444	(0.1)
ヨーロッパ	2,700	(0.1)	10,600	(0.4)	16,000	(0.3)	18,881	(0.4)
計	2,035,200	(100.0)	2,866,800	(100.0)	4,616,000	(100.0)	4,534,452	(100.0)

出所：a) [*AGI* 1894: 347]；b) [*AGI* 1913: 299–337]；c) [*ASI* Vol. 8, 1937–38: 17]；d) [*ASV* Vol. 4, 1952–53: 27]

* インドネシア人5,200，中国系混血6,200，チャム8,000，インド人2,000，ラオス人100などが含まれる。

9）クメール族古老の聞き取り調査に依れば，クメール寺院を中心とした彼らの社会を束ねる旧来のsroc（村），および下位のphum（集落）の構成空間は，植民地行政上のxa（元来キン族世界の末端行政村）やap（同様に自然集落）とは重なり合わないまま，日常生活の下では植民地末期まで保たれたという可能性も否定できない［今村 1997: 139］。プノンペンに仏教研究所を創建したKarpeles氏による1920年代末の視察記に依れば，チャヴィンのクメール人社会の話言葉はカンボジアの純粋クメール語からは「堕落した」クメール語であったという。また1937年にチャヴィンのフランス人行政官は，9万人のクメール人が109寺院の1,500人の僧侶の下に，「慣習と民族の伝統を誠実に守って」生活していると報告した［Brocheux 1995: 237］。

10）バッタンバンやカンポートへのコーチシナのクメール人の移住は1924年から始まった［Brocheux 1995: 236］。

表 8　チャヴィン省の民族別人口

	1894 (a)		1913 (b)		1943 (c)	
キン	67,000	(53.3%)	99,900	(51.7%)	182,000	(63.7%)
クメール	54,400	(43.3%)	88,000	(45.6%)	97,000	(34.0%)
中国	4,200	(3.3%)	5,000	(2.6%)	6,655	(2.3%)
その他アジア	−		100	(−)	45	(−)
ヨーロッパ	30	(−)	53	(−)	−	
計	125,630	(99.9%)	193,053	(99.9%)	285,700	(100.0%)

出所：a) [*AGI* 1894: 347]；b) [*AGI* 1913: 299–337]；c) [*ASI* Vol. 11, 1943: 23]

表 9　フランス植民地期のチャヴィン省稲作付面積の推移（1888–1954 年）

(ha)

1888	1898	1908	1928	1925/29	1926/30	1931
108,798	116,788	135,770	150,000	155,000	160,000	160,530

1935/36–1939/40	1951/52	1952/53	1953/54
141,400	106,000	108,000	118,000

出所：1888 年～ 1939/40 年のデータは *BEI* [各年]，1951/52 年～ 1953/54 年のそれは *ASV*。

に，第一次世界大戦前まではクメール人人口の増加傾向がみられる。しかしそのチャヴィン省も，人口比は 1943 年に 3 割台に落ち込んだことがわかる。

〈耕地の拡大〉

チャヴィン省の水田面積は，19 世紀末にデルタ全省で最大規模の 11 万 ha に達していた（表 9 参照）。さらに同省は，19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて，低地の開墾ブームを迎えた。水田面積は，この時期に 117,000 ha から 136,000 ha に，毎年 2,000 ha ずつ拡大したのである。その最大の誘因は，フランス植民地政府がハウ河以西のトランスバサック地方の開拓を本格化させる足がかりとして，チャヴィン省内にコチエン河からハウ河に抜ける運河の建設および延長をめざしたからだ。例えば，ホアトゥアン地域の北西部に接するチャヴィン水路は，1876 年に天然の川を整備した全長 5 km の運河であったが，1884 年には南の Ba Tieu 運河と，さらに 1897 年には Lop 川と繋がれてハウ河に達する重要な運河に整備された。交通路の完成は，19 世紀末から 20 世紀初頭のチャヴィン省内における処女地の開墾に役立った [SEI 1903: 8–9]。

世紀転換期の同省には，コチエン，ハウ両河沿いの地域と南シナ海沿岸部にマングローブ原生林が残っていた。農地は，内陸の海岸平野から砂丘列を超えて南に向かって開発された。同省の東部には虎が，またコチエン河，ハウ河，南シナ海沿岸部のマングローブにはイノシシやシカが多く生息し，農民は乾季の始まりとともに収穫物をそのような野生動物から守る工夫をした [*ibid.*: 28]。

完成した運河のおかげで沼地の排水が可能となった海岸平野や砂丘列間の低地が次々に開発

されていった様子は，同省のモノグラフに記録されている。人々は運河に繋ぐ二次水路を掘削し，盛り土をして道を作った。それは，田圃に潮水が浸入するのを防ぐ為でもあった。土地所有者たちは，土地に傾斜をつけたり，畦を作って自分の水田を改良した。貧しい人々も良い土地を見つけて開墾し，その後に所有権を確定してもらうためにコンセッションに申請した［*ibid.*: 25］。ホアトゥアン周辺ではすでに1880年代にコチエン河の支流Tom川，Sang川に挟まれた土地開発権がキン族によって要求され，許可された。[11] しかし，世紀転換期の開発ブームが過ぎると，水田面積は，1931年をピークにその後は減少に転じた。

省別稲作面積および生産量のデータから，植民地期を通して，チャヴィン省の水田の土地生産性は，コーチシナ全体の平均値より高いという結果が得られる（表10）。さらに表11にあるように，20世紀初頭のチャヴィンは畑作も盛んで，様々な作物が商品作物として生産されていたことが窺われる。栽培作物の多種性は，開拓地の単調な作物体系と比較して，チャヴィンの農業生産が相対的に長い歴史をもつ証左であると考えられる。また，飼育されていた家畜の多さが目を引く。水牛24,000頭，牛23,000頭，馬1,500頭，豚35,000頭という数値は，当時の別の諸省のそれと比べて突出した数値である［*ibid.*: 28］。

ホアトゥアンのQui Nong集落に住む93歳の老人（1906年生まれのクメール人）に依れば，

表10　チャヴィン省の米生産性

(ton/ha)

	1927/28	1935/36 ～ 1939/40	1949/50
チャヴィン	1.29	1.44	1.47
コーチシナ平均	1.17	1.26	1.30

出所：作付け面積，収穫量のデータを*BEI*からとって算出。

表11　チャヴィン省の農作物作付け一覧（20世紀初頭）

(ha)

米	119,904	落花生	72	甘蔗	155	肉桂	1,109
トウモロコシ	102	胡麻	13	煙草	125	バナナ	653
豆・菜種	1,210	椰子	842	藍	—（ママ）	マンゴスチン	210
イモ	1,052	綿花	252	油椰子	3,612	麻	12
桑	140	野菜	2,918				

出所：［SEI 1903: 27］

11）当時のBich Tri村で，Vo Van Sanという人物に，20 ha 6 aresの払い下げが認可［Trung Tam Luu Tru Quoc Gia II（以下TTLTと略）1880a: SL. M. 74 6271］。同地域には1881年にもTra Van Bongに2 ha 72 aresが認可［TTLT 1880b: SL. M. 7 6272］。Vinh Truong村にも土地84 haがTran Van Thuに払い下げられた。このほか1880年にはCang Long郡のLang The水路に沿って，それぞれ10 ha規模の14区画が申請したキン族に分配された［TTLT 1880c: SL. M. 7 6273］。

表 12　グエン朝期ホアトゥアン地域の農地面積推定　（1 mau＝4,894.4 ㎡）

	Xa/Thon	公田	畑（公土）
(Vinh Loi Tong)	Qui Nong	447	60
	Y La	67	29
	Ky Phong	85	6
	Da Can	174	30
	Da Coc	102	24
	Phi Nhieu	37	13
	Da Hoa	326	118
	Than Mat	33	7
	Bich Tri	76	68
(Tra Binh Tong)	Vinh Truong	406	73
計		1,753 mau （約 858 ha）	428 mau （約 210 ha）

出所：Qui Nong～Bich Tri は［Nguyen Dinh Dau 1994: 348–355］，Vinh Truong は［*ibid.*: 333］。
注：Vinh Loi 総には私田・私土はない［*ibid.*: 347］。Tra Binh 総にはこのほか私田，私土の分類有り，ただし面積は不明。

彼が子供の頃のホアトゥアンの砂丘は大木や竹林に覆われ，集落を繋ぐ道は砂が深く，曲がりくねって牛車を引くのに苦労したという。当時チャヴィンの町へ行くには，雨季には Kinh 川を遡って小舟でチャヴィン水路に入るか，また乾季にはチャヴィン市の南の Da Loc 村低地を経由する小道を利用した。砂丘上では，樹木を伐採し，溜め井戸を掘って畑を増やした。人々が集住しているところに寺があり，集落と集落の間は離れていた。砂丘の東の麓に広がる低地では田圃が開かれたが，時々コチエン河沿いの原生林に棲むイノシシが群をなして荒らしにきた［髙田 1998: 75–76］。

村の老人たちの証言に依れば，現在の水田のほとんどは植民地期に開田を終えた。グエン朝期の当該地域の水田面積はおおよそ 1,753 mau（858 ha），畑地面積は約 428 mau（210 ha），合計 1,000 ha 以上と推計される（表 12）。現農地面積は先述のように約 2,400 ha であるから，大まかに述べれば，19 世紀後半からフランス植民地期にホアトゥアン周辺農地は 2 倍以上の規模に拡大されたと推測される。チャヴィン省全体の水田面積が 1930/31 年頃を頂点に増大が見られなかったこと考え合わせると，植民地支配期の後半にはフロンティアの開拓はほぼ終了していたことが推察される。

IV　土地集中とその解体

IV-1　植民地期チャヴィンの土地所有構造およびホアトゥアンの大地主

フランス植民地期のメコンデルタでは，開拓と同時に土地の集中が進んだ。1920 年代後半の実態調査をまとめた Y. Henry は，コーチシナの土地所有を 3 つのカテゴリーに分類した。す

なわち5 ha以下は小規模土地所有，5～50 haは中規模土地所有，50 ha以上は大規模所有とされた。中規模所有は，5～10 haと10～50 haの2タイプに分けられる。当時の農業生産力レベルでは，一農家の平均的な経済規模（家族労働を基本にした生産活動によって自立的な家計を維持できる農地規模）は10 haと見なされた。

コーチシナの50 ha以上の大規模所有は，全土地所有者数の2.5%（6,316人）[Henry 1932: 182] である。この層の分布は，Rach Gia，Long Xuyen，Can Tho，Bac Lieuなどデルタの西部諸省に集中している。しかし，チャヴィン省も西部諸省に次いで大規模所有者が多く，その数は447である。さらに，その内の500 ha以上の大規模な土地集積者は21に達している（この数字は隣接するVinh Long省で4，Ben Tre省では7に過ぎない）。

他方でチャヴィン省には，5 ha未満の小規模所有者数も，隣接する先の2省と同様にきわめて多い。コーチシナ全体をみれば，小土地所有者が多い地域は大土地所有者が少ない傾向にあるのに対して，チャヴィンは小規模所有が多いにもかかわらず，その対極の大土地所有者数も多いのが特徴である [*ibid.*: 176]。

表13は聞き取り調査で得られたホアトゥアンのフランス期の大地主についての情報をまとめたものだ。被調査者はその小作人や大地主の子孫である。筆者は被調査者の記憶や数値の信憑性をできるだけチェックするために，複数の被調査者に対して同一地主の名を挙げて確認作業を繰り返した。仏領期の土地登記簿は，外国人の閲覧が難しく，傍証史料の収集も困難であった。当時の土地所有状況を厳密に再構成することは不可能だが，ここでは歴史の生き証人の目から見たホアトゥアンの大地主を描き出すことに努めたい。被調査者の年齢から推計すれば，彼らの直接的記憶はホアトゥアンの植民地末期のものと見るべきであるが，彼らの一族，父母，祖父母の土地所有や生活についての記憶も，貴重な情報として考察した。

古老たちの話に依れば，フランス時代のホアトゥアンとその周辺にはとりわけ有名な3人の大地主が記憶の中に存在した。ホアトゥアンの在村地主としては，Ky Laのクメール人Son Thach Xuanの一族が，1,700 haを越える所有地をもつ最大規模の大土地所有者であった。Ky Laのもう一人の大地主Ca Suoi（クメール人）は，Xuanの息子である。[12] Son一族の土地集積は，とりわけ20世紀初頭に著しく進んだ。その所有地は，Ky La，Da Can，Tri Phong，Da Hoaをはじめ，Tieu Can県やCau Ngang県にも存在した。同表13のDa Hoaに住むKim一族はSon家の親戚である。

---

12) Son Thach Xuanは，カンボジアの代表的ナショナリストであるソンゴックタンSon Ngoc Thanhの実父。従ってSuoiはタンの兄弟である。ソンゴックタンは1936年からプノンペンで発行された民族主義を鼓舞するクメール語新聞『アンコールワット』誌の編集に携わった。日本降伏前夜にカンボジア独立国家の短命な政府を組閣し，その後南部ベトナム共産主義勢力との連携の道を見いだそうとしたが，1945年10月に，復帰したフランスによって逮捕された [Mabbett and Chandler 1995: 236]。Khmer Issarakの創設メンバーで，後にロン・ノル政府の首相府顧問に就任。

表 13　フランス植民地期のホアトゥアン地域の地主

ha：1 cong＝1,200 ㎡で換算

規模別分類	地主の名	地主の居住地	土地の所在地	所有規模
100 ha 以上	Kim Prac	Da Hoa		1,920－2,040
	Son Thach Xuan	Ky La	Ky La/Tri Phong	2,040
	(Ca Suoi)	Ky La	Da Can/Cau Ngang	—
	Tran Van Tiep	Phuoc Hao	Hung My/Luong Hoa	3,600
	Tran Van I	同上（Tiep の子）		600
	Pormeca	Tra Vinh のインド人	Ky La/Hung My	120 以上
	Kim Gin Dang の父	Da Hoa	Da Hoa/Phuoc Hao	120
	Phan Cong Hoi の父	Phuoc Hao		240
	Phan Van Xuan	同上（Hoi の祖父）		10,000
50 ha～100 ha	Thach Gong	Qui Nong	Qui Nong/Da Can	50－60
	Lam Truong	Tra Vinh の中国人	Hung My	80 以上
	Kim Inh の父	Qui Nong	Ky La/Tri Phong Tieu Can/Cau Ngang	30
10 ha～50 ha	Nguyen Thi Lau	Tra Vinh	Chang Mat/Qui Nong	22
	Banh Hu	Tri Phong の中国人	Tri Phong/Chang Mat	20
	Tu Ba Hoa	Saigon/Phuoc Hao	Da Hoa/Phuoc Hao	18
	Thach Um	Da Hoa	—	10
	Thach Lam の義父	Da Hoa	—	10
	Huynh Van Ia	Tri Phong	—	—
	Phan Thi Binh の父	Vinh Loi	—	—
	Arthor	Tra Vinh の仏人教師	Xuan Thanh	10
	Dang P. Minh の父	Vinh Bao	Vinh Bao	11
	Thach Huynh の父	Ky La	—	10
	Thach Keo	Tri Phong	—	10
	Thach Chup の父	Tri Phong	—	25

出所：聞き取り調査の結果。

Da Hoa のクメール人 Dang（1926 年生まれ）の父は，開拓資金を返せなくなった隣村の地主の土地を買い上げて大地主となった。Dang の妻は，他県の 1,000 cong（120 ha）を所有した大地主の娘であった。先の Son 一族はじめ，上記の Kim 家など，大地主の一族はソクチャン省の同じクメール族富裕層とも姻戚関係を結んで，メコンデルタ大地主階級の一角を形成した。その子弟は，パリの大学に留学し，カンボジア人としての民族的アイデンティティーを培った。また先の Ky La や Da Hoa の大地主，Qui Nong の Thach Gong は，本人や息子たちが村の長老（huong ca）や村長（xa truong）を勤め，フランス植民地地方政府の信任が厚かったという。

3 人の大地主のうち最後の一人は，隣村 Phuoc Hao の Phan 家の出身者である。その一族の家譜に依れば，先祖は 19 世紀初頭に Vinh Truong 村に生まれたキン族である。先祖は，18

世紀の後半に福建からコチエン河の畔に渡来した中国人の祖先の血を引く娘と結婚して，旧 Bang Da 地域（現 Phuoc Hao，ホアトゥアンの南）の開拓者の列に加わった。19 世紀半ばのことである。人の 3 倍も働く強靱な体力をもった伝説の人物で，周辺に散在していたクメール人や中国人を加えて村創設の請願に必要な人数を集めて，グエン朝政府に許可を申請した。[13] 息子の代（19 世紀末から 20 世紀初頭）には，1,000 ha を越える土地を集積した。

フランス植民地支配期に Phuoc Hao 村に居住したホアトゥアンの不在大地主は，この Phan 一族の分家に属する人物で，3,000 ha を所有したという。彼はコチエン河の中州の村や Hung My 村の土地を，チャヴィンに住むインド人から買い取った。彼は，キン族であるが，先の Ky La のクメール人大地主とも親戚関係にある。

このほかに，チャヴィン省都に住む中国人，インド人，そして規模は大きくないがフランス人の地主たちも人々に記憶されていた。フランス人教員や金貸しのインド人チェティーの所有地はホアトゥアンの北部 Xuan Thanh 方面にあり，また中国人は砂丘東側の低地やコチエン河沿いの地域，また Da Can や Tri Phong にも土地を所有していた。

聞き取りから得られた土地集中の諸事例は，当初は①開拓の成功者が基礎を築き，その後②20 世紀初頭以降，耕地の購入によって土地集積が進められた。Phuoc Hao 村在住のキン族の例では，やはりキン族起源の村 Hung My のコチエン河沿いの低地や中州の島の新開地が集積され，他方のクメール在村地主はクメール起源の集落の土地を広域に所有した。成功したクメールの一族は，農民の土地を次々と直接に買い上げるとともに，負債の抵当に入れてあった土地を集積したインド人や中国人の金貸しから土地を買収して所有地を拡大した。植民地末期には，土地所有を軸とした村民の階層分化は相当に進み，一握りの大地主の下に，多くの零細土地所有者や小作人，土地なし農民が存在したことは明らかである。

IV-2　独立戦争の帰結

1945 年に 8 月革命が起きた時，ホアトゥアン周辺の農村でベトミンは権力を奪取したわけではなかった［髙田 1998：71］。しかし，インドシナ（抗仏）戦争が始まると，現 Xuan Thanh, Vinh Loi 地域，また Chang Mat 村では，キン族の小作農や農業労働者が革命運動に身を投じた。彼らは不作の時に小作料を減免しない地主を殺害したり，戦争末期にチャヴィンの町を去ったフランス人やインド人の土地をそのまま占拠して，自分たちで分配した。

Tri Phong のクメール人中規模地主の息子で，ベトミン運動に参加したケースもあった。彼

13）Phuoc Hao, Dat nuoc va Con Nguoi, Cau 7 Yen, Cau 5 Hoi（Phan 家の家譜）より。彼はトゥドゥック帝（在位 1847-83）の要人であった Phan Thanh Giang の家臣として尽くし，その功績によって Phan の姓を与えられた。この一族は 20 世紀初頭には当時の開明的愛国運動に熱烈に共鳴し，東遊運動に対する支援活動を行い，また両大戦間期にはトロツキスト Nguyen An Ninh を匿ったこともある。

に依れば，1948年頃からチャヴィン周辺では，小作人たちの地代不払いが見られるようになった［同上論文］。しかしながら，一方ではクメール民族主義者たちの政治的活動が，村内に影響を与えた形跡がある。植民地地方政府は彼らの動きを取り込みながらも，対策を講じない訳にはいかなかった［Engelbert 2000: 135］。

1955年に誕生する南ベトナム（ベトナム共和国）政府の時代に，ホアトゥアンで進行した重要な変化は，一つに「国民化（キン族への同化）」政策，いま一つは大土地所有制の崩壊である。

共和国政府は，フランス植民地期の旧村を自治集落 ap や xom の下位レヴェルに格下げして新しい村落 xa の下に合併した。この結果地方行政機構の末端組織「社 xa」の数は，植民地時代に比べて激減した。新「ホアトゥアン村」は，キン族起源の旧 Vinh Truong 村を砂丘上のクメール族地域に合併する一方で，南端のクメール族起源の旧 Da Hoa 村は分割され，南半分がキン族の優勢な新 Phuoc Hao 村に吸収された。ドラスティックな行政再編は，末端の村々にキン族主導の「ベトナム化」を強制したと考えられる。クメール族の古老に依れば，旧 Chang Mat 村では，植民地時代は少なかったキン族の移住が独立期以降に急増した［同上論文：73］。

1960年にアメリカ軍が作成した調査村周辺の地図を見れば（図2），クメール語由来の地名はほとんど失われ，ベトナム風に変えられている（Tra Vinh は Phu Vinh へ，また Tri Phong, Qui Nong, Ky La の名は消し去られた）。ホアトゥアンのクメール富裕層は，子弟を次々にプノンペンに留学させた［髙田 1997: 74］。一般の農民も親戚を頼ってカンボジアに移住した。ベトミン運動に参加したクメール人もまた，ゴーディンジエム政府の反共弾圧を避けてプノンペンに身を隠した［髙田 1998: 71］。

ジエム政権は，植民地政府が「少数民族保護」政策の一環としたクメール族の植民地軍への投入［General de l'Indochine 1930］を引き継ぎ，南ベトナム共和国軍の諸隊に彼らを再編した。独裁体制に反対していたキンの人々とクメール人が直接に対峙することになり，その後の両民族間関係に深い傷跡を残した。

植民地期に形成された大地主階層の解体要因として，(a) 不在地主の土地占拠・分配，(b) 政府の農地改革による土地没収と再分配，[14] (c) 相続による所有規模の縮小が挙げられる。

ホアトゥアンにおいてインドシナ戦争中に解放区となり，ベトミンによる土地分配が進んだのは，先述の通り，村の北部地域やコチエン河に近い低地，中州の島などである。不在地主は隣村のキン族やチャヴィンに住む外国人であったために，小作人や農業労働者は占有者と成り得た。

14）ベトナム戦争後のメコンデルタの集団化に関わった Liem の著書に依れば，南ベトナム政府が1970年から1973年の間に実施した農地改革では，858,821人の小作人に合計1,003,325 ha の土地を分配した。1956年からの分配分も含めると，約130万人の小作人が186万 ha の土地を分配されたという［Lam-Thanh-Liem 1986: 65］。

1970年代初頭のグエンヴァンティエウ政権期の農地改革では，とりわけ多数の小作人への土地分配，また占拠した土地に対する土地権の分配が実際に進められた。調査のなかでKy LaのSon一族の関係者に依れば，このときの改革でかなりの土地が没収されて，小作人に分けられたという。

しかし筆者の聞き取り調査で最も印象深く思われたのは，(c) の相続による所有規模の減少であった。Phuoc Hao村の大地主一族の旧家の場合，1920年代以降に子供への相続を繰り返すうちに，相続者の土地所有規模は，劇的減少をみたことが明らかである。ある被調査者A（80歳のキン族）の場合，その父（4代目）は1920年代に200 haの土地を相続によって所有したが，父自身はAを含めて10人の子供をもうけたので，20 haずつを子供に分け与えた。戦争が長期に及ぶなか，とりわけ土地配分が争点となったホアトゥアンでは，人々は名義をできるだけ子供に分散させて土地没収を免れる傾向が強かった。

土地保有の細分化は，現代の砂丘上村落の最も深刻な農業問題である。ホアトゥアン村の1世帯当たりの土地使用規模は平均0.73 haで，土地なし層は約20%に達している（表14，15参照）。

表14　各集落の1戸当たり平均農地面積（1995年）

(ha)

Vinh Loi	1.173	Xuan Thanh	0.691
Da Hoa	1.097	Chang Mat	0.518
Qui Nong	1.022	Da Can	0.508
Bich Tri	0.868	Ky La	0.444
Tri Phong	0.841	Vinh Bao	0.135

出所：ホアトゥアン村役場。

表15　ホアトゥアン村土地使用規模別割合（1995年）

使用規模	戸数	%
3 ha ～4 ha	22	0.7
2 ha ～3 ha未満	99	3.0
1 ha ～2 ha未満	446	13.7
0.1 ha～1 ha未満	1,446	44.3
0.1 ha未満	605	18.6
土地なし	642	19.7
計	3,260	100

出所：ホアトゥアン村役場。

結　　語

最後に本稿での議論をまとめておくことにしたい。

（1）調査村は，古い砂質の微高地（砂丘）とその両斜面に続く低地，メコン河の支流に注ぐ小川とかつてはマングローブ樹林等を含む海岸複合地形の典型例である。最大標高 3.6 m 程度で樹木に覆われた微高地は，公共施設，寺院，住居，道路，水田，畑地などに利用された。低地は，海抜ゼロメートルから1メートル程のために冠水しやすく，海水の浸入による土壌の塩分と窪地の硫酸酸性土壌の問題を含んだ。

（2）砂丘およびその斜面上で営まれたクメール族の農業は，雨季には天水に依存した水田耕作と，起源は不明であるが，円錐形の大穴を掘削すればわき出る豊富な地下水を利用した乾季の裏畑作（イモ，根菜，野菜類）が中心である。メコンデルタは，元来雨季になると降雨や洪水によって浸水地が広がり，人間の居住空間すら確保できない。砂丘は自然の排水によって居住地が確保しやすく，また地下水のおかげで飲料水の確保と1年を通した農業生産が可能である。砂丘上は，上座部仏教寺院を中心に先住民クメール族の古い集落とかつての農業生産の核心域が存在した。

（3）一方ホアトゥアンにおけるキン族の移住は，19 世紀初頭にチャヴィン川河口に築かれた拠点村に始まる。フランス植民地支配が確立される以前には，キン族社会は塩分土壌と水不足の問題がある砂丘北端と南端および潮汐が浸入するコチエン河支流の自然小河川の流域に留まっていた。新参の彼らは，恵まれない農業条件のなかで，漁業等を主要な生業とした。

しかし 19 世紀末から，植民地政庁が行政の末端単位 xa の領域設定をすすめるなかで，未開発のままに留まっていた砂丘上の森や低地の開田ブームが始まった。キン族は植民地秩序の法的・行政的枠組みの中で進出し，次第に行政村は「多民族社会」を含むようになった。

（4）低地は，問題土壌の土地を除いて植民地時代に開田がほぼ終了した。そこでは 1990 年代はじめに至るまで，降雨に基本的に依存する在来種雨季稲の1期作が続いた。コチエン河支流沿いの東側低地では潮汐を利用した灌漑田で稲と魚介類を同時的に産した。乾季には小河川両岸の土手を高くして農地への潮水浸入を防止した。

（5）かつては相対的に豊かな農業生産を行っていた砂丘は，人口増加に伴うインヴォリューション化現象によって土地細分化と生産力の低下を余儀なくされている。これに対して砂丘両側の低地では，1980 年代後半から組織的に行われている水利事業のおかげで真水の供給と排水を可能にする水路が掘削され，2期作化が達成されつつある。掘り割りを工夫して凹凸を作り出し，稲作のほか畑作や果樹栽培を組み合わせた多角的農業が低地部で可能になりつつある。

（6）植民地期のチャヴィンの砂丘上村落社会は，一握りの大土地所有者と多数の土地なし農

民・小土地所有者に分極化した。ホアトゥアンの在村クメール大地主一族は，他村やソクチャンのクメール大地主一族と姻戚関係を結び，フランス植民地体制を支えたメコンデルタ地主階層の一角を形成すると同時に，クメール人としての民族的アイデンティティーを再生した。

ホアトゥアンの不在地主は，隣村で土地の集積に成功したキン族有力旧家，植民地期にチャヴィンの省都に住んだ中国人のコメ仲買人，インド人金貸しなどであり，彼らの所有地は砂丘の古い農業核心域の周辺で，農業条件の比較的悪い地域や新開地に多く集積された。インドシナ戦争勃発後に，こうした不在地主の土地は，実際に耕作していたキン族の小作人や農業労働者たちによって実質的に占有された。

（7）大土地所有制の崩壊要因のなかで，相続による所有権の移転は無視できない。植民地期においてすでに，大地主の所有地は多子への均分相続によって，2～3世代を経過するうちに急速に分割されつつあった。その動きは，さらに1946年以降の戦争と革命のなかで加速した。地主は自己防衛的に相続や売却を通して，土地没収から逃れようとした。最終的には1970年代初頭の農地改革で，当該村のクメール大地主の残っていた小作地もほぼ収用されて，多数の耕作農民に土地権が分配された。

フランスからの独立と社会変革を争点としたインドシナ戦争において，キン族主導の革命闘争にホアトゥアンのクメール族がどのように関わったか，その実態は不明な点が多い。クメール族は，親米ジエム政権の時代，キン族による同化主義の嵐と植民地時代を継承した国軍への再編化にも巻き込まれた。かつては砂丘の先住者であった彼らが，農業変化と政治変動に次第に追いつめられて，「祖国」カンボジアとの関係もしくは民族的アイデンティティーを強めていく危険性は，常に存在し続けたと考えられる。

謝　辞

調査団の受け入れと諸手続きについてベトナム国家カントー大学はじめ，チャヴィン省人民委員会，同省農業関連機関，ホアトゥアン村の県・村人民委員会，各集落のスタッフの方々に大変お世話になった。調査に協力して下さった通訳のTran The Trungさんと Nguyen Anh Phongさん，調査中の様々な雑務を献身的にこなされた若い研究者の方々にも厚く御礼を申し上げたい。そして，農作業や休息の時を割いて外国人調査者を家に受け入れ，拙い筆者のインタビューに答えて下さった多数の農民の方々に，心からの謝意を表します。

引用文献

Annuaire général de l'Indochine, Cochinchine (*AGI*). 1894.

———. 1943.

Annuaire statistique de l'Indochine (*ASI*). Hanoi: Imprimerie d'Éxtreme-Orient (IDEO).

Annuaire statisitique du Vietnam (*ASV*).

Brocheux, Pierre. 1995. *The Mekong Delta: Ecology, Economy, and Revolution, 1860–1960.* University of Wisconsin-Madison.

Bulletin économique de l'Indochine (*BEI*). Hanoi-Haiphong: Imprimerie d'Extreme-Orient (IDEO).

デルベール. 1996.『カンボジアの農民』石澤良昭他（訳）.（原著 J. Delvert. *Le Paysan cambodgien*. Paris and the Hague: Mouton. 1961）

Engelbert, T. 2000. Ideology and Reality: *Nationalitatenpolitik* in North and South Vietnam and the First Indochina War. In *Ethnic Minorities and Nationalism in Southeast Asia*, edited by Thomas Engelbert and Andreas Schneider. Berlin: Peterlang.

(Le) Général de l'Indochine. 1930. Cochinchine, La protection des minorites ethniques (Cambodgiens) (INDO-GGI, 53650), in Archives Nationales Centre des Archives d'Outre-Mer in Aix-en-Provence.

Henry, Y. 1932. *Économie agricole de l'Indochine*. Hanoi: Gouvernement général de l'Indochine, Inspection général de l'Agriculture, de l'Elevage et des Forets.

今村宣勝. 1997.「1996年8月メコンデルタ調査チャヴィン省フィールドノート・メモ」『メコン通信』（文部省科学研究費補助金国際学術研究「メコン・デルタ農業開拓の史的研究」研究報告書）No. 2：126-174. 千葉敬愛短期大学国際教養科髙田洋子研究室.

河野泰之. 1997.「1996年8月 Tra Vinh 省 Chau Thanh 県 Hoa Thuan 村調査結果報告」『メコン通信』No. 2：49-68.

河野泰之；松尾信之. 1998.「1998年3月水利・農業調査結果」『メコン通信』（文部省科学研究費補助金国際学術研究「メコン・デルタ農業開拓の史的研究」研究報告書）No. 5：82-109. 敬愛大学国際学部髙田洋子研究室.

Labussière. 1889. Étude sur la propriété foncière rurale en Cochinchine et particulièrement dans l'inspection de Soctrang. *Excursions et Reconnaissances* No. 3.

Lam-Thanh-Liem. 1986. *Collectivisation des terres, L'Exemple du Delta du Mekong*. Paris: SEDES.

Mabbet, I.; and Chandler, D. 1995. *The Khmers*. UK: Blachwell.

松尾信之. 2001.「植民地期土地税台帳から見た『近代的』土地所有制度導入事業――ホーチミン市古文所館の調査から」『ベトナムの文化と社会』第2号. 風響社.

Nguyen Dinh Dau. 1994. *Nghien Cuu Dia Ba Trieu Nguyen, Vinh Long* 永隆. TP Ho Chi Minh.

Phuoc Hao, Dat nuoc va Con Nguoi, Cau 7 Yen, Cau 5 Hoi.

Social Republic of Vietnam. 1999. *General Statistical Yearbook 1998*. Hanoi.

(La) Société des études indo-chinoises (SEI). 1903. *Géographie phiysique, economique et historique de la Cochinchine, Monographie de la province de Trà-Vinh*. Saigon.

髙田洋子. 1984.「20世紀初頭のメコン・デルタにおける国有地払下げと水田開発」『東南アジア研究』22(3)：241-259.

――――. 1996.「チャヴィン省のクメール・クロム――1995年夏のメコンデルタ農村調査報告」『国際教養学論集』（千葉敬愛短期大学）No. 6：1-35.

――――. 1997.「1996年夏チャヴィン省チャウタイン県ホアトゥアン村調査報告」『メコン通信』No. 2：69-100.

――――. 1998.「Tra Vinh 省 Chau Thanh 県乾季農業調査, Hoa Thuan, Hoa Loi, Phuoc Hao 村現地調査」『メコン通信』No.5：54-81.

――――. 1999.「メコン・デルタの多民族社会――Tra Vinh 省 Hoa Thuan 村の史的研究」『敬愛大学国際研究』第3号：113-143.

Tinh Uy, Uy Ban Nhan Dan Tinh Tra Vinh. 1995. *Lich Su Tinh Tra Vinh, Tap Mot (1732-1945)*. Ban Tu Tuong Tinh Uy Tra Vinh.

Tran Thanh Phuong. 1989. *Cuu Long Dia Chi*. Nha Xuat Ban Cuu Long.

Trung Tam Luu Tru Quoc Gia II (TTLT). 1880a. SL. M. 74 6271. Tra Vinh, Plan d'une parcelle de terrain domanial située au village de Vinh Truong, canton de Tra Binh cultivee en rizieres et demandée par Vo Van Sanh.

――――. 1880b. SL. M. 7 6272. Tra Vinh, Plan d'une parcelle de terrain domanial située au village de Vinh Truong, canton de Tra Binh cultivée en rizières et demandée par Tra Van Bong.

――――. 1880c. SL. M. 7 6273. Tra Vinh, Plan d'une parcelle de terrain domanial située au village de Vinh Truong, canton de Tra Binh cultivée et demandée par Tran Van Thu.

――――. 1884. IA 17/123. Elections colonials : Dossier d'elections coloniales au titre indigène du 24.8.

1884 de diverses provinces: Can Tho, Soc Trang, Tra Vinh, My Tho, Vinh Long.
———. 1900. IA17/244. Elections coloniales au titre indigène du 15.4. 1900 de diverses provinces: Can Tho, Tra Vinh, Ben Tre, My Tho, Tan An, Listes des Délégués.
———. 1908. IA 17/265. Elections coloniales au titre indigène du 22. 11. 1908 des provinces des Tra Vinh, Can Tho, Bac Lieu, Soc Trang, Sa Dec, Vinh Long.
Vu Nong Nghiep Tong Cuc Thong Ke. 1991. *So Lieu Thong Ke Nong Nghiep 35 Nam (1956-1990)*. Hanoi.